**特別史跡　大湯環状列石**

この遺跡は秋田県鹿角市にあり、8000個を超える石が2つの大きな環状に配置されています。この環状列石は紀元前2000年頃のものであり、その配置から、太陽の動きが把握されていたと考えられます。その構築には、多大な努力と綿密な計画が必要だったことでしょう。構内の博物館は、環状列石に関する情報を紹介しており、この遺跡で出土した土器や儀式に使う品々を展示しています。

*環状列石の特徴*

2つの環状列石は内側の環と外側の環から構成されており、これらの環は小さく配置された石からできています。各環状列石の環の中には、1つの石が立てられた周りに放射状に石が並べられています。これらの放射状の配石は、日時計と類似しており、夏至と冬至の間には、北西－南東の軸に沿って影が1本の線になるように並べられています。考古学調査では、配置された石の下に墓穴が発見されており、考古学者たちはそれぞれの配置が1つの墓を示していると考えています。

*万座環状列石*

2つの環状列石のうちの大きいものが万座環状列石と呼ばれており、直径は52mあります。約6500個の石が使われており、100を超える配石の存在が明らかにされています。

*野中堂環状列石*

野中堂環状列石は、万座環状列石から100mほどのところに位置します。野中堂環状列石は、約2000個の石と60を超える配石で構成され、直径は44mあります。

*考古学上の発見*

環状列石の外側の環の周りから、4本柱と6本柱の建物の基礎が発掘されました。また、儀式に使われたと思われる埋蔵物も見つかりました。その建物の基礎の特徴と付近で発見された大量の儀式用具から、考古学者たちは、その建物は住居ではなく、儀式用の建物だったと考えています。万座環状列石周辺にあるいくつかの建物では、この環状列石の4000年前の姿を見学することができます。

*環状列石の構築*

考古学者たちは、この環状列石の構築には200年以上かかったと推定しています。最も重い石は200kg以上もあります。石は、最大4km離れた川から、単純な道具のみを使って運ばれてきたのでしょう。

*緑色の石*

大湯環状列石で使われている石の多くは、緑がかっています。この固有の種類の石は、大湯環状列石から東へ数キロ離れた場所にある諸助山のものです。諸助山の麓を流れる安久谷川から、遺跡発掘現場に最も近い大湯川を下って移動してきたものと考えられます。この特定の石が、なぜ環状列石の建設で重宝されていたのかは不明ですが、何らかの特別な意味があったものと思われます。

*大湯ストーンサークル館*

発掘された数百個の土器・土偶・土版・石器は、大湯ストーンサークル館に展示されています。土器には、遺体を埋葬するのに使われた大きな甕のようなものや精巧な装飾のある鉢・壺などがあります。石器のほとんどは小型で、剣、鉢、三角形の岩版といった形状のものです。すべての出土品には装飾が施されており、儀式に使われたものだと考えられています。

*関連遺跡*

北日本の大規模な先史遺跡には、他に伊勢堂岱（秋田）、鷲ノ木（北海道）、小牧野（青森）および大森勝山（青森）の環状列石などがあります。